1万人のエコチェック事業中間報告

全公衛協が参加、省エネ意識が浸透

実践率50％には届かず

「一万人のエコチェック事業」は、公衆衛生推進委員が家庭で省エネに取り組み、電気等の使用量を前年同月分と比較して、その効果を数値で把握＝『見える化』する事業である。三年目を迎えたこの事業、今年は全ての市町公衛協が参加し、まさしく全県で取り組む事業となった。

今年の実践率は二十八％で、県大会には二六〇六枚のカードが集まった。目標に掲げた実践率五十％以上は達成できなかったが、毎年、二～三％ずつ向上している。

今年は、昨年に比べ平均気温が高く、省エネ効果がみえにくいと予想していた。しかし、結果は一世帯あたり平均約十四キロワットhの削減となり、努力が数値に現れた。東日本大震災以降、節電に対する意識や行動は大きく変化し、「エアコンの温度は二十八℃に設定」、「電気をこまめに消す」などの省エネ対策が多い中、今年は「グリーンカーテンをした」「車をやめ、自転車や徒歩にした」など、楽しみながら省エネを実践する人が増えた。

推進委員の任期が二年という公衛協が多く、新しい推進委員の事業への理解や省エネ意識の浸透が課題の地域も多い。その中で、実践率を向上させるため、さまざまな工夫がなされている。

①返信用封筒による回収
②事前通知や会議などでの呼び掛け
③電話や訪問による督促
④カード配布時期や回収方式の変更など

今年、実践率が高かった公衛協は、坂町公衛協の八十六％、神石高原町の七十一％、大崎上島町の六十七％であり、いずれも推進委員が二十～六十名と、電話や訪問による回収が可能な地域であった。多くの推進委員を抱える公衛協の、実践率向上の鍵はカードの回収方法である。今後、カードは投函できる仕様に変えるなど、地域活動支援センターでも改善していきたい。

（地域活動支援センター）

●1万人のエコチェック事業実践率一覧●　（広島県公衆衛生大会回収時点）

№	公衛協名	全委員数	実践者数	実践率	№	公衛協名	全委員数	実践者数	実践率
1	府中町	99人	46人	47％	14	安芸太田町	48人	13人	27％
2	海田町	95人	18人	19％	15	北広島町	408人	118人	29％
3	熊野町	31人	9人	29％	16	安芸高田市	300人	15人	5％
4	坂町	22人	19人	86％	17	東広島市	1,075人	164人	15％
5	江田島市	167人	71人	43％	18	三原市	400人	27人	7％
6	竹原市	87人	45人	52％	19	世羅町	484人	78人	16％
7	大崎上島町	52人	35人	67％	20	尾道市	310人	56人	18％
8	大竹市	70人	27人	39％	21	福山市	1,184人	565人	48％
9	廿日市市	285人	96人	34％	22	府中市	638人	300人	47％
10	廿日市市大野	665人	131人	20％	23	神石高原町	31人	22人	71％
11	廿日市市佐伯	21人	5人	24％	24	三次市	450人	107人	24％
12	廿日市市吉和	23人	6人	26％	25	庄原市	320人	125人	39％
13	廿日市市宮島	44人	22人	50％	26	呉市	1,959人	486人	25％

【全推進委員数】9,268人
【実践者数】2,606人【実践率】28％

【電気】
1世帯あたりの電気使用量　約524kWh
平均増減量　⇒　約14kWh削減

第53回広島県公衆衛生大会講演要旨

世界一受けたいうみの授業
海洋ジャーナリスト　永田 雅一 氏

海の温暖化 写真で解説

森林の活用が効果的

北極の氷で、年を重ねた多年氷の厚さは五メートルに及ぶ。これらが近年の夏の暑さで溶け出し、メルトポンドと呼ばれる水溜りが猛スピードで増えた。温暖化により北極海周辺の氷が大量に溶けると、海水の塩分濃度が薄まり、軽くなる。すると海流を作り出すベルトコンベアが機能しなくなり、結果、赤道近くの暖流が北に届かず、寒冷化が起こる。映画「Day after tomorrow」は、ニューヨークが凍りつくという話だったが、十分に起こりうること。わたしの海洋研究所がある南洋のパラオ諸島では、海面が十五センチメートル上昇し、砂浜が削られて草木が枯れる現象も起こっている。

地球のメカニズムが崩れることにより、全体のバランスが崩れる。

今年九月、北極海の氷が過去最小を記録した。二〇〇七年の観測から日本列島二個分の面積が減ったことになる。現在、地球上で排出されるCO_2は約八十億トン。森林などで吸収できるCO_2は約三十億トンであるため、差し引き五十億トンが年々蓄積されている。科学者によっては、あと十年で北極海の氷はなくなるだろうという人や、地球はすでに限界点を超えていると言う人もいる。温暖化対策のため、アメリカでは地中に二酸化炭素を封じ込める吸収装置の開発も進んでいるようだが、自分たちが何もしないのではなく、できることをしなければいけないだろう。

周囲の森を増やして元気にすること。そして、各自が省エネを実践すること、この二つのことを伝えたい。CO_2吸収源である木を活用することも重要。富士宮市では、伐採した剪定枝を可燃ごみで引き取っていたが、市民へ無料で利用してもらうよう資源化することで廃棄物が減った。他の都道府県でも進めてほしい活動だ。

地域のリーダー役である皆さんが周りの方へ取り組みを伝え、その運動の輪を広げることで、将来の子どもたちのために地球環境を残していこう。

（地域活動支援センター）

TEAM
地域　エコ　アクション　ミーティング
最前線2
③脱温暖化ぬまくまフォーラム

市内へ広まる出前講座

省エネの技を各地へ発信

福山市沼隈町を中心に活動する「脱温暖化ぬまくまフォーラム」は、平成16年12月15日に設立して以来、女性会を中心に、まちづくり推進委員会・公衛協・JA・小学校と連携しながら、出前講座やマイ箸・マイバッグ持参運動、環境家計簿記帳運動、緑のカーテンや段ボールコンポスト普及活動などに取り組んでいる。

中でも出前講座は、〝温暖化問題と家庭でできる省エネ〟をテーマに、地元の保育所や小学校、公民館を中心に実施していたが、今では、JAや病院、町外の公民館からも要望があるほど人気だ。

昨年実施した「鍋帽子づくり講座」に町外から参加した方から、自分の住む地域にも広めて省エネを推進したいと相談があり、11月15日、福山市東村町の公民館で同講座が開かれた。「鍋帽子は保温性に優れ、煮立った鍋に被せておくだけで料理が完成する。調理にかかる電気やガスの使用時間が短縮でき、省エネにつながるうえ、とても経済的。そんな優れものを、楽しみながら作りましょう」と、当協議会代表の岡田妙子さんの言葉から講座が始まり、12人が挑戦した。

「持って帰って使うのが楽しみ」と鍋帽子づくりに励む参加者たち

鍋帽子の材料となる生地と綿は、近所の方から不要になった着物や布団、地元のカーテン業者から切れ端を提供してもらい有効活用する。また、着物をリメイクして作った帽子やアームウォーマー、ちゃんちゃんこなども披露され、不要になったものを再利用することの大切さを伝えた。

さらに、鍋帽子の効果を体感してもらおうと、まだ大根に箸が通らない状態のおでんの鍋に鍋帽子を被せておき、講座が終了する3時間後の状態を確認した。鍋の蓋を開けると、湯気が湧き上がるほど熱く、保温効果の高さに参加者は驚いていた。そして、味の染み込んだおでんを試食しながら、「持って帰って使うのが楽しみ」と声を弾ませた。

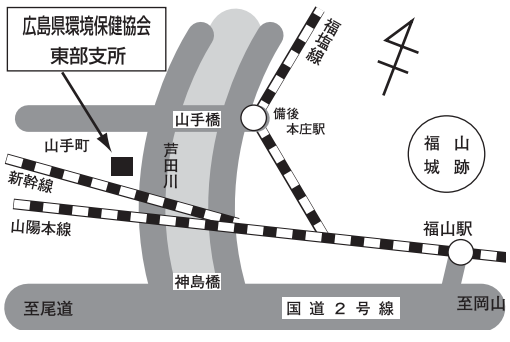
岡田代表は、「これまで、延べ300人に鍋帽子づくりを伝授してきた。少しでも省エネに関心を持ち、活用してもらえれば嬉しい。これからも各地へ出向き、省エネの技を発信していきたい」と意気込む。

今後ますます広がる活動の『環』に期待したい。

（脱温暖化センターひろしま）

※鍋帽子は、全国友の会の商標登録Ⓡです。

東部地区の検査受付は、支所でも行います！



食品検査・衛生検査・飲料水検査・環境検査など
【受付時間】月曜日から木曜日　8:30～17：30

財団法人 広島県環境保健協会
東　部　支　所
〒720-0092　福山市山手町5-32-26
TEL　084-952-0007
FAX　084-952-0009